

# 國學院大學學術情報リポジトリ

形容詞被覆形ムナ〔空〕・露出形ムナシ〔空〕による名詞複合用法の通時的変遷

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 蜂矢, 真弓, Hachiya, Mayumi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000065">https://doi.org/10.57529/00000065</a>  |

# 形容詞被覆形ムナ〔空〕・露出形ムナシ〔空〕による 名詞複合用法の通時的変遷

蜂矢真弓

一

有坂（一九三一・一九三四）は、上代における名詞・動詞には、それ自身が名詞・動詞として自立するものと、複合語・派生語の語構成要素であるものがあり、それらのうち、同一形態素を持つものについて比較し、両者に「一種の母音交替」が存在すると述べている。そして、両者の末尾形態に着目し、

(a) エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合にも

用ゐられ得るもの

(b) ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がついて一語を作る場合にのみ用ゐられるもの

として、右の名詞・動詞として自立することが多い(a)を「露出形」、複合語・派生語の語構成要素として用いられることが多い(b)を「被覆形」と名付けている。

なお、本稿では、名詞・動詞の被覆形―露出形の組み合わせを持つものうち、末尾の音節がア・ウ・オ列のものを名詞被覆形・動詞被覆形、末尾の音節がイ・エ列のものを名詞露出

形・動詞露出形とする。また、基本的に、確例のみを考察の対象とする。

その上で、各品詞の被覆形が、(1)下に名詞を伴って(複合)名詞を作る場合、(2)下に接尾辞シを伴って(派生)形容詞を作る場合、(3)下に接尾辞ス・ルなどを伴って(派生)動詞を作る場合の、三つの複合・派生用法を取る場合について考え、これらを、被覆形の(1)名詞複合用法、(2)形容詞派生用法、(3)動詞派生用法、と呼ぶことにする。有坂(一九三二)では、(2)は(3)の一部という位置付けとされていたが、派生形容詞と派生動詞は別のものであるため、本稿では、(3)と(2)を分けて考える。

右と同様の考えの下、拙稿(二〇一三)では、名詞・形容詞・動詞という三つの品詞が存在し、複合名詞・派生形容詞・派生動詞の三つが存在して、被覆形の、名詞複合用法・形容詞派生用法・動詞派生用法の三用法について考察するのであれば、名詞被覆形・動詞被覆形と同様に、形容詞被覆形というものが存在するのではないかと考え、名詞・形容詞・動詞の被覆形による、名詞複合用法・形容詞派生用法・動詞派生用法の三用法について考察した。

形容詞とは、全て接尾辞シを伴ったものである。形容詞から接尾辞シを除いた部分にあたる語基(ク活用形容詞の場合

は、形態の上で語基||語幹である)が形容詞被覆形にあたることになる。ク活用形容詞・シク活用形容詞、それぞれの場合を例に挙げると、

ク活用 形容詞被覆形ヤス〔安〕+接尾辞シ  
 ↓派生形容詞ヤスシ〔安・易〕  
 シク活用 形容詞被覆形サカ〔賢〕+接尾辞シ  
 ↓派生形容詞サカシ〔賢〕

ということになる。

川端(一九七九)において、「名詞の活用」の〔C〕として挙げられたものは、名詞被覆形ア―露出形アシ〔足・脚〕、名詞被覆形ス―露出形スシ〔醜〕等のように、被覆形が、「自立形を形造る、資格的に接尾語であるもの」である《i》を伴う際に、子音(この場合はs)を挿入したものである。これと同様に考えると、形容詞被覆形が《i》を伴う際に、子音sを挿入して出来た派生形容詞が、形容詞露出形という位置付けになる。

このうち、基本的に末尾の音節がア・ウ・オ列の語基を、本稿では形容詞被覆形とし、形容詞被覆形・露出形の(1)名詞複合

用法について、拙稿(二〇一三)に引き続き考察を進めて行く。

## 二

ク活用形容詞被覆形・ク活用形容詞露出形・シク活用形容詞被覆形・シク活用形容詞露出形の四種による名詞複合法を調査したところ、この四種の名詞複合法を行う用例が、以下の通り見付かった<sup>1)</sup>。

(1) ク活用形容詞―「ク活用形容詞被覆形＋名詞」<sup>2)</sup>

…二九例―一〇八例

(2) ク活用形容詞―「ク活用形容詞露出形＋名詞」<sup>3)</sup>

…四例―七例

(3) シク活用形容詞―「シク活用形容詞被覆形＋名詞」<sup>4)</sup>

…八例―一七例

(4) シク活用形容詞―「シク活用形容詞露出形＋名詞」<sup>5)</sup>

…二三例―三八例

ク活用形容詞の場合は、被覆形の方が露出形よりも用例数が

多く、シク活用形容詞の場合は、露出形の方が被覆形よりも用例数が多いことが分かる。これには、形容詞の語幹の用法が関連している。『時代別国語大辞典上代編』の「上代語概説」にもあるように、形容詞の語幹は、「形容詞語幹＋名詞」の形態において、連体修飾語として機能する性質を持っている。よって、ク活用形容詞の場合は、語幹と形態が一致する被覆形による(1)、シク活用形容詞の場合は、語幹と形態が一致する露出形による(4)の用例数が多くなる。なお、(1)と(4)を比べると、形容詞の用例数はあまり変わらないが、複合名詞の用例数には大きな差がある。

その一方で、形容詞の語幹と形態が一致しない、ク活用形容詞露出形による(2)、シク活用形容詞被覆形による(3)の例も若干存在する。

(2) には、ク活用形容詞ウマシ〔味・可美〕によるウマシ小汀・ウマシモノ・ウマシマデノミコト〔固有名詞〕・ウマシアシカビビコヂノカミ〔固有名詞〕という例が挙げられる。

ウマシ〔味・可美〕は、(1)に当たるウマイ〔味寝〕・ウマサケ〔味酒〕・ウマヒトという複合名詞を作る一方で、(2)に当たる複合名詞をも作る。これは、(1)の「ウマ＋名詞」は「感覚的意味」、及び、「客観的に述べる状態的意味」、(2)の

「ウマシ+名詞」は「対象への評価・感情という主観的判断」を持つ意味として使い分けるためであったと考えられる。このように、意味を使い分けるために、形容詞語幹の用法と一致する(1)の複合名詞だけではなく、(2)の複合名詞が作られたものと考えられる。

一方、(3)には、アタラスミナハ・アタラスガハラ・アタラスガシメ・アタラサカリ・アタラソノカ・アタラタクミという例が挙げられる。このシク活用形容詞アタラシ〔惜〕は、(1)・(2)のク活用形容詞とは異なり、(3)の複合名詞のみを作り、(4)の複合名詞は作らない。これは、シク活用形容詞アタラシ〔惜〕の被覆形アタラ〔惜〕が、

秋の野に露<sup>つゆ</sup>負<sup>お</sup>へる萩<sup>たぎ</sup>を手折<sup>た</sup>らず<sup>を</sup>てあたら盛りを(安多良佐可里乎) 過<sup>つ</sup>ぐしてむと<sup>か</sup>か  
〔萬葉集〕四三二八

のように、感動詞乃至副詞として用いられ、ある程度自立的に用いられていたために、(3)に当たる複合名詞が作られたものと考えられる。このように、被覆形がある程度自立的に用いられている場合に、(3)に当たる複合名詞が作られたものと考えられる。

以上のことを、拙稿(二〇一五)で述べた。しかし、シク活用形容詞ムナシ〔空〕は、被覆形ムナ〔空〕が自立性を持たないにもかかわらず、(3)に当たる複合名詞を作る。これは(3)においては異例のことであるので、このことについて考えることにしたい。

### 三

まずは、ムナシ〔空〕の例を挙げる。

ムナシ〔空〕  
世の中は空<sup>むな</sup>しきものと(牟奈之伎母乃等) 知る時しいよ  
よますます悲<sup>かな</sup>しかりけり  
〔萬葉集〕七九三

シク活用形容詞であり、ムナシイという情意的意味を表す。次に、被覆形ムナ〔空〕による(3)の複合名詞の例を順に挙げ、検討する。

ムナコト〔空言〕  
……おぼろかに心思<sup>おも</sup>ひて空言<sup>むなごと</sup>も(牟奈許等母) 祖<sup>おや</sup>の名絶<sup>な</sup>

つな……  
〔萬葉集〕四四六五

『時代別国語大辞典上代編』に「むな」と【空言】(名)うそ。実のないことば。そらごと。」とあり、ムナコトのムナは、実が無いという状態の意味を表している。

ムナグルマ〔空車〕

空車に、魚、鹽積みでもてきたり。

〔宇津保物語〕藤原の君

空車に〔齋〕申ヲ積みて、陰陽師、先馬にテ出デたり。

〔宇津保物語〕藤原の君

……其邊に知りたる下人を、むな車をかりにやりて、つみて出でんとする程に、……

〔宇治拾遺物語〕一六一上緒の主得レ金事卷一三ノ一

……牛かひなどするに、むな車ひきつゞけて、……

〔蜻蛉日記〕

左府の御車をむなぐるまにて法成寺へやらせられけり。

〔古今著聞集〕

むなぐるま／たかがひのまだもこなくにつなぎいぬのはなれていかむなぐるまつほど  
〔拾遺和歌集〕四一九

『日本国語大辞典』(第二版、以下同様)の「むなぐるま【空車】」の項には、「①車蓋のない車。車台だけで、車箱や屋根などのない車。」「②人を乗せていない車。人が乗っていない車。からぐるま。」とあり、『宇津保物語』の二例と『宇治拾遺物語』の例が①の意味を表し、『蜻蛉日記』の例と『古今著聞集』の例が②の意味を表す。なお、拾遺和歌集の例は、物名を読み込んだものであり、①とも②とも分類出来ないものである。つまり、ムナグルマのムナは、車蓋等がない、または人がいないという、状態の意味を表している。

ムナバセ〔空馳〕

五〇八 大納言經信下野敦末を不幸十列と稱する事

下野敦末、競馬をつかうまつりけるが、十度むなばせをしたりけるを、經信大納言見られて、「不幸の物の十列歎」といはれたりける、比興の事也けり。

〔古今著聞集〕古今著聞集卷第十六

『日本国語大辞典』には、「むなばせ【空馳】(名)馳せたことが無益であったの意から)競馬(くらべうま)で負けるこ

と。」あり、ムナバセのムナは、馳せたことの利益が無いという状態の意味を表している。

ムナクニ〔空國〕<sup>(7)</sup>

橋六之空<sup>(8)</sup>  
曾志乃事奈久余  
 太一奈十之イタリ乃  
 幸一奈久一余

〔日本書紀私記〕御巫本・神代紀下 22ウ）  
 〔日本書紀私記〕丙本・仲哀八年）  
 橋之空國也

ソシシノムナクニのソシシノはムナの枕詞であり、『日本国語大辞典』によると、「そしし〔橋六〕（背肉（そしし）」の意）背筋（せすじ）の肉。」「そししの空國（むなくに）（「そししのむなくに」とも。背には肉が少ないところから、物事の豊かでない意にたとえる）豊沃でない土地。やせた土地。不毛の地。」とある。このことから、ムナクニのムナは、作物の取れ高が無いという状態の意味を表していることが分かる。

以上の例から、(3)「被覆形ムナ〔空〕+名詞」の被覆形ムナとは、何かが無いという状態の意味を表していることが分かる。

四

一方、露出形ムナシ〔空〕による(4)の複合名詞の例は、奈良時代には見られないが、平安時代以降になると出現する。よって、次にそれらの例を順に挙げ、検討する。

ムナシケブリ

ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむな  
 しけぶりを  
 〔古今和歌集〕一〇二八

日本古典文学大系『古今和歌集』の頭注に、「富士山は煙だけで火にならないが、わたしも成就したい恋の思いに燃えるなら燃える。富士の神でさえ消せないでいる、かいてもない煙なんだから。あきらめて投げ出した気持。」とあることから、ムナシケブリのムナシは、何の甲斐も無かったために悲しむという情意的意味を表していることが分かる。

ムナシネ〔空寝〕

言の葉のうへの緑にはかられて竹のよなよなむなし寝や  
 する  
 〔平中物語〕二一九

『日本国語大辞典』に「むなしーね【空寝】〔名〕ひとり、む

なしく寝ること。」とあることから、ムナシネのムナシは、他に誰もいないためにむなしという情意的意味を表している。

ムナシダノミ〔空頼〕

いせの海の渚によするうつせ貝むなしたのみに世をつくしつ、  
〔古今和歌六帖〕第三

『日本国語大辞典』に「むなしーだのみ【空頼】〔名〕あてにならない頼み。」とあることから、ムナシダノミのムナシは、見込みが無いために沈んだ気分になるという情意的意味を表している。頼みがあてにならないことは、単なる状態ではなく、そのことに対する感情を込めた表現であると考えて良い。

これらの用例から、(4)「露出形ムナシ〔空〕+名詞」の露出形ムナシとは、何かが無いことが原因で起こる感情という情意的意味を表しているものと考えられる。

つまり、(3)・(4)において、被覆形ムナ〔空〕は状態的意味、露出形ムナシ〔空〕は情意的意味として使い分けられていることが分かる。

五

ここで、被覆形ムナ〔空〕・露出形ムナシ〔空〕について考えるために、山口(一九八五)を見てみると、

ムナシ(空)は、ム(身)+ナシ(無)に分割されると思われるから、ク活用であることが期待され

と述べられている。

そこで、この山口(一九八五)の論に即して考えてみると、「ムナ〔空〕+名詞」は、(3)の複合名詞ではなく、(1)の複合名詞だということになる。意味の分化のために、形容詞語幹の用法と一致する(1)だけではなく(2)の複合名詞をも作ったウマシ〔味・可美〕等一部のク活用形容詞と同様に、本来はク活用であったムナシ〔空〕は、(1)となる「ク活用形容詞被覆形ムナ〔空〕+名詞」だけではなく、後に、意味の分化のために、(2)となる「ク活用形容詞露出形ムナシ〔空〕+名詞」をも作ったものと考えられる。

このことは、他の(3)の複合名詞を作るシク活用形容詞は(4)の複合名詞を作らないにもかかわらず、形容詞ムナシ



〔空〕は(3)の複合名詞だけではなく(4)の複合名詞をも作るということから考えても、「被覆形ムナ+名詞」は(1)、「露出形ムナシ+名詞」は(2)と見るのが妥当であると考えられる。

なお、平安時代～室町時代に下つてから出現する、(2)となる「ク活用形容詞露出形ムナシ〔空〕+名詞」は、意味の分化のために作られたのであり、この時期になつても、(1)となる「ク活用形容詞被覆形ムナ〔空〕+名詞」は衰退せず、両形が併存することになる。

## 六

さて、以上のことに對し、二つ付け加える。まず、第一に、以下のように、同じ名詞を伴つて、(1)「ク活用形容詞被覆形ムナ〔空〕+名詞」と、(2)「ク活用形容詞露出形ムナシ〔空〕+名詞」の両形が存在する例についてである。

ムナデ〔空手〕

水た、ふいは間の眞菰かりかねて空手にすぐる五月雨のころ  
 (『山家集』二〇七)

俱不得利、空手來歸。

(『日本書紀』神代紀下・鴨脚本)

ムナシデ〔空手〕

俱不得利空手來歸。

(『日本書紀』神代紀下・熱田本<sup>(8)</sup>)

『日本国語大辞典』には「むなで【空手・徒手】〔名〕手に何も持たないこと。武器を持たないこと。收穫のないこと。また、手をこまねいて何もしないこと。素手。からて。むなしで。」とある。そして、日本古典文学大系『山家集』の頭注に、「空手にすぐる―なすこともなく手を遊ばせて日を過ぐす」とあることから、『山家集』のムナデのムナは、何もすることが無いという状態の意味を表していると考えられる。

一方、『日本書紀』の同じ「空手」の「空」の部分において、鴨脚本の訓は「ムナ」とあるのに対し、熱田本の訓には「ムナシ」とある。これは、他の、(3)のムナが状態の意味、(4)のムナシが情意的意味を表していること、そして、熱田本よりも成立の早い『山家集』のムナデのムナが状態の意味を表していることから、一二三六年書写の鴨脚本のムナデのムナは、收穫が無いという状態の意味を表し、一三七五年書写の熱

田本のムナシデのムナシには、収穫が無いという状態の意味に、そのことが残念だという情意的意味が加わったものと考えられる。

そして、第二に、『日本書紀』熱田本において、左記のように仲哀紀八年「空」国とあるのに対して、先に挙げたように神代紀下には「空」手とあることについてである。これは、熱田本では、ムナクニ〔空国〕のムナは、作物の取れ高が無いという状態の意味に留まっているのに対し、ムナシデ〔空手〕のムナシは、収穫が無いという状態の意味に加え、そのことが残念だという情意的意味を加えるところにまで移行している、ということになるものと思われる。

是レシク、之ムナ「空」国也　（『日本書紀』仲哀紀八年・熱田本）

## 七

ここまでの論を纏めると、次のようになる。

①形容詞ムナシ〔空〕は、他の(3)の複合名詞を作るシク活用形容詞とは異なり、被覆形ムナ〔空〕は自立性がないにもかかわらず、(3)の複合名詞を作る。

②他の(3)の複合名詞を作るシク活用形容詞は(4)の複合名詞を作らないにもかかわらず、形容詞ムナシ〔空〕は、(3)の複合名詞だけではなく(4)の複合名詞をも作る。

③(1)・(2)の複合名詞を作るク活用形容詞は、意味の分化のために、(1)の複合名詞だけではなく(2)の複合名詞をも作った。

④従来(3)だと考えられて来た「被覆形ムナ〔空〕＋名詞」の被覆形ムナは状態の意味を、平安時代以降になると出現する、従来(4)だと考えられて来た「露出形ムナシ〔空〕＋名詞」の露出形ムナシは情意的意味を表す。被覆形ムナ〔空〕と露出形ムナ〔空〕との間で、意味の分化が起こっている。

⑤山口(一九八五)、及び、①・②・③・④から、形容詞ムナシ〔空〕は、本来はシク活用形容詞ではなくク活用形容詞であり、「被覆形ムナ〔空〕＋名詞」は(3)ではなく(1)、「露出形ムナシ〔空〕＋名詞」は(4)ではなく(2)である、と見るのが良いと考えられる。

八

では、次に、(1)である「被覆形ムナ〔空〕+名詞」が(3)、(2)である「露出形ムナシ〔空〕+名詞」が(4)であると従来考えられて来た理由について考える。

数少ない(1)(2)の両形が存在する複合名詞の中で、最も用例数が多いものは、**ウマシ**〔味・可美〕による複合名詞である。よって、形容詞ムナシ〔空〕と形容詞**ウマシ**〔味・可美〕について比較することにする。

先に挙げたように、被覆形ムナ〔空〕による複合名詞は奈良時代に出現している。よって、本来は存在していたはずのク活用形容詞ムナシ〔空〕も、理論上は同時期に存在していたはずである。また、シク活用形容詞ムナシ〔空〕は、先に挙げたように奈良時代に出現している。ところが、露出形ムナシ〔空〕による複合名詞は、先に挙げたように、出現が平安時代から室町時代となる。

**ウマシ**〔味・可美〕(ク活用)

鴟(略)豆良々、弥留又宇方久見(『新撰字鏡』)

ウマイ〔味寝〕

…しくし夫串ろ味寝寝し間とに(于魔伊禰矢度備)庭にはつ鳥鷄とりかけは鳴なくなり…  
(『日本書紀』 継体紀・九六)

ウマサケ〔味酒〕

味酒うまいけ(宇磨佐開)三輪みわの殿の朝門あさかどにも出いでて行ゆかな三輪の殿門とらとを」  
(『日本書紀』 崇神紀・一六)

ウマヒト

…うまひと貴人は(宇摩比等破)貴人どちや(于摩譬若奴知野)親友いとこはも親友どちいざ闘あはな我われは…  
(『日本書紀』 神功紀・二八)

**ウマシ**〔味・可美〕(シク活用)

かぐや姫いに言ふやう、「ふなんでう心地ちすれば、かく、物を思ひたるさまにて、月を見たまふぞ。うましき世に」  
と言いふ。」  
(『竹取物語』)

ウマシ小汀

即自然有三可伶小汀」。  
汀此云波麻師

(『日本書紀』 神代紀下)

ウマシモノ

我妹子わがもこに逢あはず久しもうましもの(馬下乃)阿倍橘あべたちばなの若生わがむすまでに  
(『萬葉集』 二七五〇)

ウマシマデノミコト(固有名詞)

名曰三可美真手命。可美真手此云于藤詩傳耐

〔日本書紀〕 神武即位前紀

ウマシアシカビヒコヂノカミ (固有名詞)

如二葦牙一因二萌騰之物一而成神名、宇摩志阿斯訶備比古

遲神。此神名以音名 〔古事記〕 神代

ク活用形容詞ウマシ〔味・可美〕は平安初期に出現する。しかし、万葉集には以下のような例もある。

飯食<sup>いひ</sup>めどうまくもあらず (味母不<sup>レ</sup>在) 行き行<sup>ゆ</sup>けど安くも

あらず (安久毛不<sup>レ</sup>有) あかねさす君が心し忘れかねつも

〔萬葉集〕 三三五七

「安久毛不<sup>レ</sup>有」と対になる「味母不<sup>レ</sup>在」はウマクモアラズと訓むのが良いと考えられ、ウマシの確例は平安初期であるけれども、『萬葉集』にあつたと見て良いであろう。一方、被覆形ウマ〔味・可美〕による複合名詞は、奈良時代に出現している。ところが、シク活用形容詞ウマシ〔味・可美〕は、出現が平安時代であるが、露出形ウマシ〔味・可美〕による複合名詞は、既に奈良時代に出現している。それに加え、平安時代に出

現したシク活用形容詞ウマシ〔味・可美〕は孤例である。

つまり、形容詞ムナシ〔空〕と形容詞ウマシ〔味・可美〕とは、以下の二点において異なるということになる。第一は、ク活用形容詞ムナシ〔空〕は、本来は存在していたはずであるが、例が実在する訳ではないのに対し、ク活用形容詞ウマシ〔味・可美〕は例が実在するという点である。そして、第二は、形容詞ムナシ〔空〕の場合は、シク活用形容詞ムナシ〔空〕が先に出現し、明らかに時代が下ってから露出形ムナシ〔空〕による複合名詞が出現するのに対し、形容詞ウマシ〔味・可美〕の場合は、露出形ウマシ〔味・可美〕による複合名詞が先に出現し、後にシク活用形容詞ウマシ〔味・可美〕が出現するという点である。

この二つの違いのために、(1)である「被覆形ムナ〔空〕+名詞」が(3)、(2)である「露出形ムナシ〔空〕+名詞」が(4)であると従来考えられて来てしまった可能性が考えられる。しかし、前述の通り、形容詞ムナシ〔空〕は、本来はシク活用形容詞ではなくク活用形容詞であり、「被覆形ムナ〔空〕+名詞」は(3)ではなく(1)、「露出形ムナシ〔空〕+名詞」は(4)ではなく(2)であると捉えるのが良いと考えられる。

注

(1) 上代の用例に加えて平安初期の用例も入れることにする。平安初期の用例も入れることにするのは、上代の確例だけでは用例数が少ないという理由もあるが、平安初期とそれ以降との間で言葉が大きく変わるということも理由の一つである。拙稿(二〇一三)注(1)参照。なお、**■**の用例は平安初期の用例を指す。

(2) (1)に当てはまる形容詞は以下の通り。( )内の数字は、その形容詞によって作られた複合名詞の異なり語数である(注(3)・(4)・(5))も同様。なお、被覆形―露出形の体系の中には、末尾がア列・ウ列・オ列甲類・オ列乙類の被覆形、末尾がイ列甲類・イ列乙類・エ列乙類の露出形は含まれるが、エ列甲類はこの中には含まれていないので、タケシ(武)のタケを形容詞被覆形と見なせる可能性があるため、タケシ(武)も(1)に入れておく。なお、**■**の用例は平安初期の用例、**■**の用例は平安中期以降の用例を指す(注(3)・(4)・(5))も同様。

アカシ(明)(九例)・タカシ(高)(八例)・ナガシ(長)(四例)・ワカシ(若・稚)(八例)・フカシ(深)(二例)・アサシ(浅)(四例)・チヒサシ(小)(二例)・カタシ(堅)(三例)・イタシ(痛)(二例)・スクナシ(少)(二例)・ウマシ(味・可美)(三例)・ハヤシ(早・速)(二例)・アラシ(荒)(七例)・ヤスシ(安)(二例)・ウスシ(薄)(二例)・アツシ(熱)(二例)・フルシ(古)(二例)・タケシ(武)(二例)・ニコシ(柔・和)(四例)・ホソシ(細)(二例)・トシ(利・鋭・聡)(二例)・フトシ(太)(四例)・オホシ(多)(二七例)・トホシ(遠)(二例)・ヨシ(吉)(一例)・シロシ(白)(四例)・クロシ(黒)(四例)・ヒロシ(広)(二例)・アラシ(青)(一例)

(3) (2)に当てはまる形容詞は以下の通り。

ウマシ(味・可美)(四例)・アラシ(荒)(一例)・ヨシ(吉・好)・

宜(一例)・カタシ(堅)(二例)

(4) (3)に当てはまる形容詞は以下の通り。

アタラシ(惜)(六例)・マサシ(正)(一例)・タダシ(正)(三例)・アラタシ(新)(一例)・タハシ(靡靡)(三例)・ナグシ(和)(二例)・メツラシ(珍・希見)(二例)・ムナシ(空)(一例)

(5) (4)に当てはまる形容詞は以下の通り。なお、注(2)におけるタケシ(武)と同様の理由で、シケシ(穢蕪)を(4)に入れておく。また、レの甲類・乙類の区別が不明であるウレシ(欲)、及び、コホシが本来の形でありコホシからの母音交替であると考えられるコヒシ(恋)を含むウラコヒシ(裏恋)を(4)に追加出来る可能性もあるが、今回は追加しないでおく。

サカシ(賢)(一例)・イカシ(蔽)(五例)・イスカシ(傲恨)(一例)・カナシ(悲・哀・憐)(二例)・オナジ(同)(二例)・ハシ(愛)(二例)・クハシ(妙・細)(二例)・カグハシ(二例)・ハナグハシ(花細)(二例)・マクハシ(目細)(二例)・ウラケハシ(二例)・オヤジ(同)(四例)・メツラシ(珍・希見)(二例)・クシ(奇)(二例)・ウツクシ(愛)(二例)・クスシ(奇)(一例)・ウツシ(現・顕)(三例)・シケシ(穢蕪)(二例)・イソシ(勤)(二例)・ミガホシ(欲見)(二例)・トホシ(二例)・オヨシ(二例)・ヨロシ(宜)(二例)

(6) 林(二〇〇三)による。

(7) 『日本書紀私記』御巫本の例の( )内の文字は、増補国史大系第八巻『日本書紀私記』(吉川弘文館)と照らし合わせて、正しいと思われるものを追加記入した。

(8) 神戸親和女子大学附属図書館蔵写真による。以下、同様。

(9) 林(二〇〇三)参照。

【使用文献】

『宇治拾遺物語』(日本古典文学大系 岩波書店)

- 『宇津保物語』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『古代歌謡集』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『古今和歌集』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『校證古今和歌六帖（上）』（有精堂）  
 『古今著聞集』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『古事記祝詞』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『影写叢刊 1・2 古事記 日本書紀（上）（下）』（八木書店）  
 『新編 国歌大観』（角川書店）  
 『山家集 金槐和歌集』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『天治本新撰字鏡増訂版』（臨川書店）  
 『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（新編日本古典文学全集 小学館）  
 『竹取物語 伊勢物語 大和物語』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『日本書紀』（新編日本古典文学全集 小学館）  
 『日本書紀』（日本古典文学大系 岩波書店）  
 『日本書紀第二』（古典保存会）  
 『増訂国史大系 第八卷 日本書紀私記』（吉川弘文館）  
 『萬葉集』（新編日本古典文学全集 小学館）  
 『萬葉集総索引』（平凡社）  
 村田正博編（一九八二）『（続）日本書紀・日本後紀 三代実録録所収和歌・歌謡用語索引』（山辺道二六）  
 『時代別国語大辞典上代編』（三省堂）  
 『日本国語大辞典第二版』（小学館）

〔参考文献〕

安部 清哉（一九九六）「語彙・語法史から見る資料——『篁物語』の成

- 有坂 秀世（一九三一）「立時期をめぐりて——」（『国語学』一八四）  
 『国語にあらはれる一種の母音交替について』  
 『国語音韻史の研究 増補新版』一九五七 三省堂  
 川端 善明（一九七九）『活用の研究Ⅱ』（大修館書店）  
 金水 敏（一九八三）「上代・中古のキルとヲリ——状態化形式の推移——」（『国語学』一三四）  
 阪倉 篤義（一九六六）『語構成の研究』（角川書店）  
 橋本 四郎（一九五七）「うまし」（『萬葉』第二四号）（橋本四郎論文集 萬葉集編 一九八六 角川書店）  
 林 浩恵（二〇〇三）「形容詞語幹の用法の違例」（『萬葉』第一八五号）  
 『上代・中古に見られる形容詞派生の動詞——形容詞における意味分類との関連を中心に——』（『国語学』二二三）  
 『上代における形容詞語素とニ——なぜク活用形容詞語素は単独でニを伴わないか——』（『萬葉』第一九四号）  
 村田菜穂子（二〇〇五）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』（和泉書院）  
 山口 佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂）  
 山本 俊英（一九五五）「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」（『国語学』二三集）  
 蜂矢 真弓（二〇一三）「被覆形による複合・派生の再考察——形容詞被覆形の想定——」（『萬葉』第二一四号）  
 『形容詞被覆形・露出形＋「人」を表す名詞』の形態と意味」（『萬葉語文研究』第10集）  
 『形容詞被覆形・露出形による名詞複合法』（『国語学』二三四、予定）